

「老人と子ども統合ケア」における「老人」と「子ども」の交流

—N県K福祉総合施設への参与観察を通して—

金子真由子 長野県長野養護学校

山口恒夫 教育科学講座

キーワード: 老人, 子ども, 統合ケア, 交流

1. 問題の所在

わが国では少子高齢化や地域共同体の崩壊、核家族化などによる世代間の分離が進行している。異なった世代が日常の生活世界の中で出会う機会が減少しているため、異世代間の交流をいかに促進するかが教育や介護現場での課題のひとつとなっている。現在さまざまな取り組みがなされてきている「老人と子ども統合ケア」は、そのような異世代間の「交流」の場を意図的に設定しようという試みである。「老人と子ども統合ケア」は、土地や建物の有効利用という観点から、高齢者のための介護施設と保育園や小学校などの教育施設を合併させたことの産物という側面があるが、近年では、より積極的に教育や介護の一環として、「活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築」(厚生労働省 2003: 31-32)を目指し、老人と子どもの交流を通じて、高齢者のいきがづくりや子どもの社会性や高齢者への理解を促進しようという施策が目立ってきている。

老人と子ども間の「老人と子ども統合ケア」や「世代間交流」を主唱する論者たちは、「老人と子ども統合ケア」や「世代間交流」によって、老人の側に、自らの経験や知恵を次世代に伝達していく活動に積極的に関わる機会が開かれ、そのことによって生きがいや社会参加意欲が高まり、子どもの側では、高齢者との交流により社会性や豊かな人間関係ははぐくまれ、さらには「生きる力」が形成されることへとつながる、と一様に論じている(広井 2000b, 増山 2003)。彼らの議論においては、「老人と子ども統合ケア」が高齢者に「歓び」や「心身の状態の活性化」をもたらす、子どもの成長に不可欠な異世代との交流の機会を用意するということは、ほとんど自明であるかのようである。

老人と子どもの間に成立する交流の教育的意義については、古くから指摘されてきている¹⁾が、教育と介護を横断する視点から両者の関係性を具体的な事象に即して解明しようとする試みは極めて少ない。また、「老人と子ども統合ケア」を実践する立場からの報告は散見される(草野 2004, 多湖 2005)ものの、それらも老人と子どもの交流を、単に「ほほえましさ」や「好ましさ」といった表層的な次元で捉える姿勢にとどまっている。さらに、政策課題と結びついてすでに数多くなされてきている老人と子どもの交流²⁾は、その内実をみると「やさしく、かわいく、知恵のあるおじいちゃん/おばあちゃん」といったステレオタイプな「老人」像に基づく形式的な交流にとどまっている場合が少なくない。

それでは、「老人と子ども統合ケア」における「交流」の実態はどのようなものなのだろうか。ここで謂う「交流」とはどのような相互作用を伴った営みなのだろうか。「老人と子ども統合ケア」や「世代間交流」には、学校へ老人が訪問、あるいは幼稚園児が老人ホームへ出かけて触れ合うセレモニー型や、同一の施設内に保育園やデイサービスを統合させ、そこでの生活の一部を共に過ごすタイプなどがあるが、どのタイプの「老人と子ども統合ケア」や「世代間交流」においても、同一空間に老人と子どもがいれば自然に会話や交歓が生じ、それが子どもの成長や老人の積極性を促す効果があるはずだという前提に立っている。しかしそれは、(昔は老人と子どもは一緒に暮らしていた)というある種のノスタルジックな思いに基づい

て両者の関係を人工的に作り出そうという試みにすぎないともいえる。

本稿では、N県のK福祉総合施設における「老人と子ども統合ケア」への参与観察から得られた具体的な事例の分析を通して、「老人と子ども統合ケア」における「交流」にはどのような特性が見られるのかを解明し、異世代関係としての老人と子どもの関係性の特徴を浮かび上がらせることを目的とする。

2. 調査の対象と方法

(1) 調査対象

N県K福祉総合施設（以下、K福祉総合施設）のK保育園に通う年長児7名（男子2名、女子5名）及びK福祉総合施設の生きがいデイサービスや介護保険デイサービスの利用者（以下、老人）

(2) 調査方法

参与観察及び介護士や保育士に対するインフォーマルなインタビュー

(3) 調査期間

2003年11月～2004年12月（計23回の参与観察とインタビュー）

(4) 調査対象機関の概要

対象施設であるK福祉総合施設は、K保育園、コミュニティーセンター、老人福祉センター、高齢者生活福祉センター、障害者等共同作業所が併設されている。建物の1階部分は「K保育園」、2階は高齢者のためのデイサービスやショートステイ、3階は高齢者の住居施設のスペースとなっている。

K福祉総合施設では、月曜日から木曜日の午後2時半から3時に年長児がデイサービスに通う老人と「交流」をする時間を設けている。「交流」は1995年より行われており、統合ケアの先駆的存在であるといえる³。また、年に数回の特別行事だけの「交流」という施設が多い中、K保育園では、年長児が週に4日は必ず何らかのかたちで老人と「交流」しており、毎日の園生活に定着している。

K保育園は、N市の旧K村（2005年にN市と合併している）の子どもが通う唯一の保育園である。参与観察を行った2004年度は43名の子どもが在籍している。年齢によってクラスが異なり、1、2歳児のひよこ組（6名）、3歳児のりす組（13名）、4歳児のうさぎ組（17名）、5歳児（年長児）のぱんだ組（7名）と分かれている。

デイサービスを利用する一日平均の老人の人数は、「ふれあいセンター」で20人から25人、「やすらぎ」で7人から10人であり、どちらも老人の顔ぶれは毎日異なる。

(5) K福祉総合施設における「交流」事業の内容

参与観察を行った2004年度の交流の内容は七夕、敬老の日、運動会、クリスマス会等の行事の他に、風船バレー、体操、歌にあわせてのゲームといったリハビリ的活動、公園までの散歩、バスハイクといった野外活動、ゲームやお店屋さんごっこのための工作といった教育的活動が組み合わされている。

(6) K保育園に通う子どもの祖父母との同居率

同居もしくは同居はしていないがK村内に祖父母が住んでいる子どもと合わせて約80%である。ちなみに、調査対象者である年長児7名中、祖父母との「同居」は1名、祖父母が「K村内に住む」は5名であり、1名は祖父母と離れてはいるものの、同じN県内に住んでいる。

(7) 参与観察の視点（参与観察についての具体的な状況の説明）

「老人と子ども統合ケア」における交流に関する観察データの収集にあたり、老人と子どもの間及び老人同士の間言的相互作用、身体的接触、感情や情緒的交流に焦点をあてた。また、「老人と子ども統合ケア」においては、介護士と保育士が協働して交流の場を設定しているが、これらの職員の指導による活動の設定の仕方やそこでの活動が老人と子どもにどのように共有されたのかについても観察の対象とさ

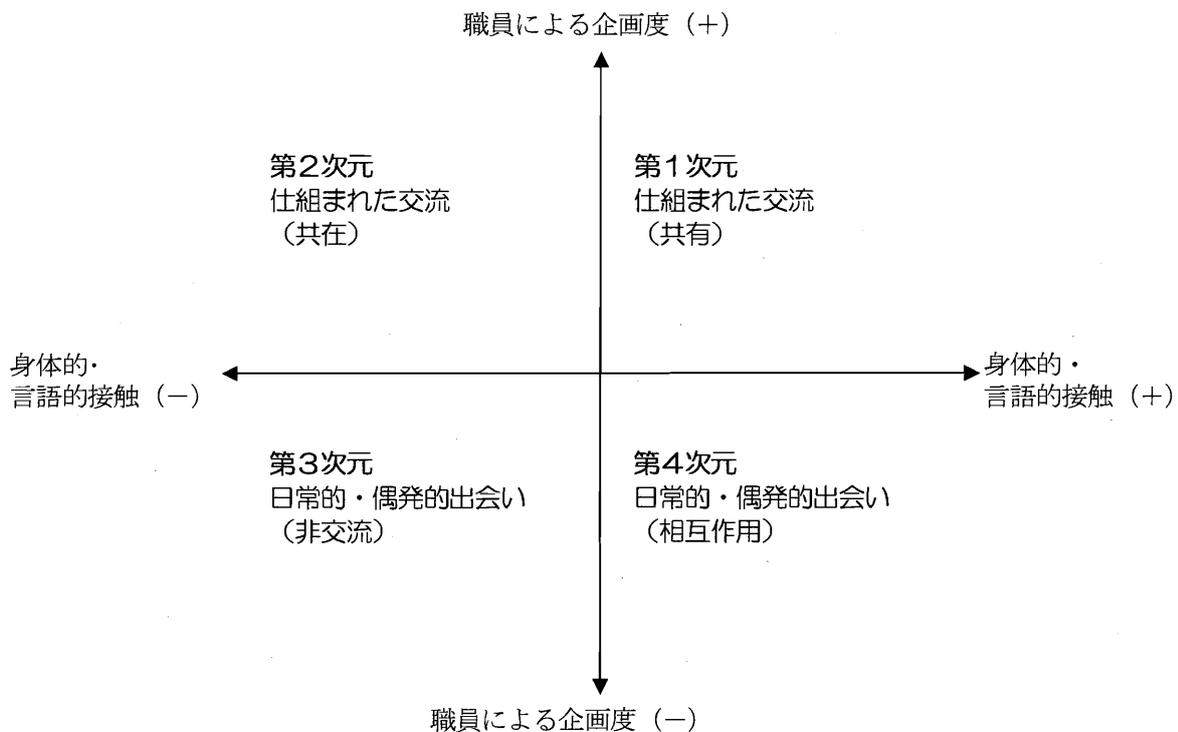
れた。

3. K福祉総合施設における老人と子どもの交流の様態

(1) 老人と子どもの交流の4つの次元

K福祉総合施設における「老人と子ども統合ケア」では、子どもと老人が活動を共有できるように保育士や介護士によって事前に「交流」の内容が設定されており、両者が何らかのかたちで接触したり、言葉を交わすことになるように仕組まれている。

参与観察によって得られたエピソードを分析するにあたり、老人と子どもの交流の様態を、職員による企画度を縦軸にとり、身体的・言語的接触（相互作用）の度合いを横軸にとって4次元に分類した（図1）。こうして第1次元〈企画化された交流（決められた活動がある）で、両者の接触あり〉、第2次元〈企画化された交流だが、接触なし〉、第3次元〈企画化されていない（決められた活動はない）、接触もない〉、第4次元〈企画化された活動はないが、接触がある〉という4つの次元が得られる。各次元を、それぞれ「第1次元：仕組まれた交流（共有）の次元」「第2次元：仕組まれた交流（共在）の次元」「第3次元：日常的・偶発的の出会い（非交流）の次元」「第4次元：日常的・偶発的の出会い（相互作用）の次元」と名づけよう。以下では、各次元に相当するエピソードを提示しながら、老人と子どもの「交流」の様態を解き明かしていく。



【図1：「老人と子ども統合ケア」の「交流」の様態】

(2) 第1次元：「仕組まれた交流」(共有)

K福祉総合施設では、交流時に必ず行う活動として握手がある。子どもたちは一列に並び、順番に老人たちと握手をしていく。ここでは身体的な接触がある。老人は子ども一人ひとりに「はい、こんにちは」などと声をかけながら握手をし、両者のあいだには言語的な相互作用の可能性も生じるが、子どもの側で

は挨拶を返す子どもと、黙ったままの子どもがいる。

次のエピソードは、プールへ行く前に水着姿で老人の部屋を訪れた子どもたちが、「おはようございます」と挨拶をした後、保育士から「今日はこれからプールへ行ってきます。その前にね、おじいちゃん、おばあちゃんたちにおはようの挨拶に来ました」との説明があり、普段通り老人と握手をしてみせたものである。

〈エピソード1：仕組まれた握手〉

子どもたちが老人ひとりひとりに握手をしている。老人たちは握手をする度に「おはよう」「はい、行ってらっしゃい」と声をかける。先頭の子どもが、列の中間あたりにいた老人Aさん（男性）と握手をしたとき、Aさんが「泳げるの？」と笑いながら聞いた。すると、その両隣の老人たちも「泳げるの？」「しっかり泳いでおいで」と言い出し、その三人の老人の周りに笑いが起こる。その間、子どもたちはAさんの問いかけに答えることはなく、「おはよう」と言うか、もしくは無言のまま握手を続けている。

握手をしながら老人たちは、「はい、行ってらっしゃい」「おはよう」と声をかけていたのだが、先頭の子どもがAさんと握手をしたとき、普段とは異なる水着という見慣れない格好に、Aさんは「おはよう」といったいつもの挨拶ではなく、つい「泳げるの？」と尋ねた。すると、両隣の老人にもその問いかけが聞こえ、それにつられたかのように「泳げるの？」「しっかり泳いでおいで」と声をかけ始め、Aさんたちのあいだに笑いが起こった。このとき、握手の流れが壊れたように見えた。ところが、「泳げるの」と言ったり、笑ったりして、普段より活発に見える老人たちに対し、子どもたちはそれに応答することなく順番に握手を続けていた。このような老人同士での活発な言動や笑いによって、子どもはその中へ入っていきにくく、ますます応答しにくくなる。

確かにここでは握手という身体的な接触は認められる。しかし、この時、子どもは「おはよう」などの決まりきった挨拶はできるが、とっさの応答はできない。つまり、ここでの握手は、子どもたちにとって不意の出来事が起きて中断されることのない機械化された行動となっている。両者のあいだに言語的な相互作用の可能性があったにもかかわらず、それは閉ざされてしまった。握手という身体的な接触は、「仕組まれた交流」の域からはみ出すことのない形式的なものである。

では、一瞬にして終わる「握手」のような挨拶ではなく、10分から15分程度の比較的長い持続的な活動ではどうだろうか。

エピソード2は、大きな太陽を作るために、細かくちぎられたオレンジと黄色の折り紙を発泡スチロールに貼っていくという活動の場面である。発泡スチロールの上ならばどこに貼ってもよいことになっている。子どもも老人も黙々とその作業を行っていた。しかし、参与観察者と同じテーブルにいた老人Bさんは作業に参加せずただ見ていたのだが、そのうち「目が見えなくてね」と参与観察者に話しかけてきた。

〈エピソード2：「貼り絵」に参加しない老人〉

部屋には6～7箇所にテーブルがあり、一つのテーブルには4人程度の老人が座っている。子どもたちが、各テーブルに3人から5人ずつ座り貼り絵を始めた。参与観察者も一つのテーブルに入る。そこには、老人3人、子ども4人、介護士1人がおり、それぞれの老人の隣には子どもがいる。子どもたちと老人たちの間には会話は無いが、老人Bさん（女性）以外はみな貼り絵をしている。Bさんが隣にいた子どもを越えて、参与観察者に「目が見えなくてね」とまぶたの上を人差し指で抑えながら

話しかけてきた。相槌を打っていると「どこに住んでいるの？」と聞いてきて、そこから参与観察者とBさんの会話が少し続く。会話の合間に「目が見えなくてね」と何度か言う。Bさんは最後まで貼り絵をしなかった。

子どもがいる、いないにかかわらず、Bさんは手先の作業を普段から行っていないかもしれないが、隣にいた子どもではなく、子どもを越えたところにいた参与観察者に「目が見えなくてね」と話しかけてきたのである。それではなぜ、わざわざ参与観察者に「目が見えない」と声をかけてきたのだろうか。

Bさんは貼り絵の作業を行わない理由を説明したくて、「目が見えなくてね」と言ってきたのである。なぜ、Bさんがこの作業に気乗りがしなかったのか、その本当の理由は不明である。そのとき、作業を行わない理由を伝える相手が子どもではなく大人（参与観察者）だったことから、気乗りがしなかった理由は子ども相手の子どもじみた作業であったからかもしれない。しかし、場の雰囲気をわかまえることができる老人は本当の理由を伏せて、「目が見えない」という自らの老いを伝えることで貼り絵の作業に参加しないことを正当化していると考えられる。

「子どもが帰った後、自分の障害のことを口にする老人もいます」⁴という介護士の言葉にもあるように、自立的な大人へ向かって成長・発達していくことが目指される子どもと、日々老いていく老人がともに作業を行うこの場面では、結果的に、老人自らが老いを突きつけられたのである。

次のエピソード3は、両者のあいだに会話が生じたものの、そこには食い違いが生じた場面である。ある日「お店屋さんごっこ」が行われた。子どもたちは三つのテーブル（お菓子屋さん、八百屋さん、お弁当屋さん）に分かれ、一斉に「いらっしゃいませー、いらっしゃいませー」と「お客」を呼ぶ。老人は紙で作ったお財布とお金、スーパーの袋を渡されている。介護士に促されて、老人たちは子どもたちのところへ行き、子どもたちが売るものを買う。「これはいくら」と老人が尋ね、「百円」と子どもが答えたり、「これはおべんとうかね」と老人が独り言のようにつぶやいたりしながら進められていく。老人が代金を支払うと子どもがそれを受け取り、正確な金額ではないが「おつり」を渡すというやりとりもある。参与観察者もその中に入って子どもや老人に声をかけたりしていたが、気がつくやうに、ある子どもと老人がなにやら言い合っている場面に遭遇した。

〈エピソード3：「お店屋さんごっこ」での食い違い〉

（お菓子屋さんでお菓子を買おうとした老人Cさん（女性）が、子どもに値段を聞いたのだろう。子どもは「ひゃくごえん」、Cさんは「5円なんかないよ」と言い合っている。Cさんの手のひらには渡されているお金が乗っているが、そこに5円はない。Cさんにたまたま5円がなかったのではなく、紙で作られたお金の種類は500円、100円、10円であり、初めから5円は含まれていない。）

子どもが「ひゃくごえん」と言うと、Cさんが「5円なんかないよ。ごひゃくえん？」と手の平に乗っているお金をみる。手の平には500円、100円、10円のお金数枚が乗っている。子どもは「ひゃくごえん」と、500円を指差しながら言う。さらにこのやり取りは続く。

Cさん「ごひゃくえん？」

子ども「ひゃくごえん」

Cさん「ごひゃくえん？5円なんかないよねえ」（と、横にいた参与観察者に向かって言う。参与観察者は「そうですね」とだけ答える。）

子ども「ひゃくごえん」

Cさん「ごひゃくえん？」

子ども「ひゃくごえん」

このようなやり取りが続き、結局Cさんは500円を子どもに渡す。子どもは、それを黙って受け取り、Cさんとは逆側を向いて「いらっしやいませー、いらっしやいませー」と言い始める。Cさんは子どもとは逆側にいた参与観察者のほうを向いて「おもしろいねえ」と少し笑って言い、「これ、もらっていいんだよねえ」とつぶやいて目の前にあるお菓子をひとつ袋に入れる。

500円のことを指しながら「ひゃくごえん」という子どもと、手の平のお金を見ては「5円なんかないよねえ」「ごひゃくえん？」と聞き返すCさんとのやりとりには食い違いが起こっており、両者とも譲ることはない。

Cさんは、子どもが500円のことを「ひゃくごえん」と言い間違えていることを知りつつも、そこで子どもに合わせて適当にやり過ごす気持ちはない。何度も「ごひゃくえん？」と聞き返しているからである。ここでの「お店屋さんごっこ」では、まだ計算のできない子どもが適当な金額の「おつり」を渡す場面もあるが、500円を渡して「おつり」をもらうつもりもない。「5円なんかないよねえ」と大人（参与観察者）に同意を求める場面があるが、「5円は存在しない」とことと「子どもが指しているのは『ひゃくごえん』ではなく『ごひゃくえん』」ということに老人はこだわっている。

このようなやりとりの中でCさんは500円を渡すが、子どもの間違いを受け入れ、合わせたのではない。この状況を終わりにしたくてやむを得ず500円を渡したのである。それは最終的に、その状況を見ていた大人（参与観察者）に「おもしろいねえ」と笑うことで子どもとの険悪な関係を濁そうとし、「これ、もらっていいんだよねえ」と確かめるようにつぶやきながらも、子どもに尋ねないでお菓子を袋に入れるという行為に結びついている。

また子どものほうも、指していた500円を老人から受け取るが、わだかまりは残っている。無言でお金を受け取り、その後、お菓子を老人に渡すこともなく別の方向を向いて「お店屋さんごっこ」を再開しているからである。

「お店屋さんごっこ」には「求められる（期待される）活動」や「役割」があるため、ごっこ遊びにおけるやりとりは行われたが、最終的には食い違いによるわだかまりが生じ、それが解消されることなく「交流」は途絶えている。

老人と子どもの関係ではこのような展開であったが、大人と子どもの関係ではどうだろうか。大人と子どもは教育的な関係である。そこで、大人は子どもに合った話し方で「ごひゃくえん」と「ひゃくごえん」を説明するか、子どもに合わせてその場をうまくやり過ごさだろう。しかし、Cさんは子どもに合わせてことなく、老人特有の頑固さで子どもに接し、子どもも機嫌を損ねた。両者のやりとりは途絶え、お互いが別の方向を向く結果となった。

(2) 第2次元：「仕組みられた交流」（共在）

保育園の運動会が近づくと、子どもの遊戯を老人が見学する。見学という性質から、言語的・身体的な接触の必然性がない。老人はステージに腰かけ（園児用のステージなので階段が2、3段しかついていないような、老人が座るのに丁度よい高さ）、子どもはフロアにいるため、両者の間には物理的な距離も存在する。

〈エピソード4：遊戯の練習と見学①〉

運動会で踊る予定となっている年少から年長の子どものたちの遊戯を老人が見学するため、保育園のホ

ールに8名の老人が来る。

保育園のホールには子どもたちが運動会の練習の隊形で立っている。ホールのステージには、子どもたちと向き合うかたちで老人が座っている。

音楽にあわせて踊る最中、子どもたちは黙って踊るが、音楽と踊りに合わせて片手を振り上げながら「いえーい、いえーい」と言う場面がある。その瞬間、そのときまで黙っていた老人たちは全員「ほっほーう」「おーっ」と拍手をし、笑いが起こった。

観察の隣にいた老人（女）が、「小さいのに先生の言うことをよく聞いてよくやるね」と参与観察者に言ってきたので、「そうですね」と返答する。

〈エピソード5：遊戯の練習と見学②〉

ホールのステージには、子どもたちと向き合うかたちで老人14名が座っている。

踊っている最中、ずっと下を向いて寝ているようにも見えた老人（女）が、「いえーい、いえーい」という子どもたちの掛け声で、顔を上げて笑う。掛け声が終わり、音楽と子どもたちの踊りだけになると、また下を向いている。

黙って踊る子どもたちとその踊りを見ている老人の間には、目に見える相互作用はない。さらにアップテンポの音楽（「マツケンサンバ」）とその踊りに合わせて老人側に手拍子が起こることもなく、中には下を向いている老人も見られた。そのため、忠実に踊る子どもたちの姿を、老人は決められたものだから仕方なく見学しているようにも見える。子どもの踊る姿を目にし、それに惹きつけられているような喜びは感じられない。子どもも、老人に見られているという意識はあり黙って踊るのだが、自分の両親が見ている運動会とは異なり、恥ずかしそうな笑顔もない。

途中、遊戯の中に掛け声と同時に手を振り上げる動作が取り入れられている。およそ30人の子どもがいつせいに「いえーい、いえーい」と声を上げるとかなりの音量になる。このとき、それまで静寂だった老人が「ほっほーう」「おーっ」という歓声とともに拍手や笑いが起こった。何の変化もなかった遊戯に生じた掛け声と動作により、老人の側にもこのような行動が生じた。これは子どもの掛け声と動作を通して単に反応したのではなく、「小さいのに先生の言うことをよく聞いてよくやるね」という言葉から、子どもの遊戯を見学する大人としての動きが起こり、それが歓声と拍手へと結びついている。

ここでは「仕組みられた交流」により両者はお互いを意識しているが、両者の間には物理的な距離があるため身体的・言語的接触はなされない。しかし、同一の空間は共有しているため、子どもの行為の変化によって老人もそれに対応している。第1次元のように「求められる（期待される）活動」や「役割」はあるが、距離がある分、応答がなく食い違いが生じる両者が無理に身体的・言語的接触をしなくてすむ。つまり、第1次元に比べて「役割」度は低くなり、多少「肩の力を抜く」ことができる。

この次元での活動は、第1次元にも第3次元にも転化できるようなベクトルを持つ。例えば、第1次元のように両者が身体的・言語的接触をするような活動を目指して、子どもの遊戯の輪に老人が入り込んで共に踊るといった企画もありうる。また、次節の第3次元のように、企画化されていないが遊戯練習の場へ子どもに知らせることなく見に行く（もしくは、子どもの遊戯の練習風景に偶然出会う）ことも起こりうる。

(3) 第3次元：日常的・偶発的の出会い（非交流）

エピソード6は、特に決められた活動はなく、子どもが保育園の庭で泥んこ遊びを行っている最中に、

老人が急に見学に来た場面である。

この日の朝、泥んこ遊びの服装で老人の部屋へ朝の挨拶に行ったとき、保育士から「今日はプールがお休みなので、これから泥んこ遊びをします。泥で汚れてもいい服に着替えてきました」という説明があった。そのとき介護士から「みんなで行ってみるね」と提案があった後の出来事である。子どもが思い思いに過ごしている空間に老人がいる。先のエピソードと異なる点は、子どもが老人の来訪を知らされていないことである。

〈エピソード6：老人の突然の訪問〉

年長組の子どもたちと、数名の年中、年少、ひよこ組みの子どもたちは水道がある場所で「ジュース屋さんごっこ」をしていた。赤ならイチゴジュース、黄色ならバナナジュース、白なら牛乳といった具合にバケツの中に絵の具と水を入れ、それをプラスチックのコップへ注いでいる。初めは、年長組みがジュースをつくり、下の学年の子たちが注文するかたちをとってはいたが、みなジュースを作る行為に熱中しているようで、ジュースを注文し、それを作って渡すという行為はあまり行われていなかった。参与観察者ははじめ、子どもたちに「バナナジュースをください」といったように「ジュース屋さんごっこ」に参加しており、3、4人の子どもたちは、ジュースを作るたびに参与観察者のところへ持ってきては「次は何ジュース？」と聞いていくというやりとりがあった。

老人が見学に来て、教室と庭の境目に座ったので、参与観察者は「おばあちゃんたちが来たよ」と周りの子どもたちに言い、ある子どもに「おばあちゃんたちにこのジュースを持って行ってあげて」とジュースを差し出してうながす。しかし、子どもは参与観察者に「持って行って」と言うだけで、自分では行こうとしない。結局、他の子どもたちも、老人は2メートル弱の場所にいたのだが、誰もジュースを持っていかなかったし、話しかけることもなかった。

また、ジュース作りにかかわっていない他の子どもたちは（全体から見るとこちらのほうが多い）、それぞれが泥と水で遊んだり、丸太のようなものを転がしていたり、庭に造られた山に登るなどあちこちに散らばっていた。

老人は、目の前のジュース作りの子どもたちや、あちこちに分散している子どもたちの姿を目で追っている様子だった。はじめは黙っていたが、少し経つと一人の老人が指差しながら何か言う。すると、周囲にいた老人たちも「かわいいねえ」「なあ」「まあ、泥でねえ」とぼそぼそと言い出した。しかし、座るところが狭かったため、ほかの老人とは別な場所に座っていた一人の老人だけが何も言っていなかった。

泥んこ遊びが終り、ひよこ組（未満児）の子どもたち6名が、先生に連れられ来て、順番にお年寄りよりと握手をする。保育士が子どもの泥だらけの手を気にしていたが、老人は握りながら「やわらかいねえ」と言っている。

介護者の提案で老人が子どもの泥んこ遊びを見に来たのだが、行くかどうかは老人に委ねられている。また子どもには、老人が来ることははっきりと告げられていない。そのため、これまでのエピソードとは異なり、職員による企画度が小さい交流である。

子どもたちは、参与観察者にはジュースを持ってくるものの、老人へは持っていくこともなく、老人のほうへ振り返る様子もない。「仕組まれた交流」では、事前に老人と何を行うかが子どもたちに伝わっており、「役割」や「求められる（期待される）活動」が子どもに理解されている。そのため、握手や「お店屋さんごっこ」といった「交流」も可能であった。

ところが、老人の突然の訪問によって参与観察者が「おばあちゃんたちにこのジュースを持って行ってあげて」と伝えても、参与観察者に「持って行って」とジュースを押し返す。距離のある老人と子どもの間に身体的・言語的交流を求めようとして大人が突然働きかけても、子どもは軽く一蹴し、自分の世界へ戻っていく。

老人は子どもの遊ぶ姿を目で追っており、そのうちに「かわいいねえ」「なあ」「まあ、泥でねえ」と老人の間で子どもの姿を話題とした会話が、活発ではないがぼそぼそと生じた。

つまり、大人によって「仕組まれた交流」でなければ、子どもは老人との関係に乗ってこない。ここには「仕組まれた交流」のような「求められる（期待されている）活動」や「役割」がないためである。また、お互いが自然に歩み寄り、相互作用が起こることもない。しかし、この次元の交流は、老人と子どもが単に同一空間にいただけで決められた交流ではないので、「役割」や「求められる（期待されている）活動」がない分、第2次元以上に両者は「肩の力を抜いて」目の前の遊びに熱中したり、気の向くままに好きな風景を眺めている。

（4）第4次元：日常的・偶発的出会い（相互作用）

第4次元は、企画化された活動はないが、接触や相互作用がある場合である。「老人と子ども統合ケア」は職員によって企画化された交流であるため、理論的にはこの次元にあてはまらない。しかし、企画化されていないところにエピソードが生まれることもある。

企画化されていないところで、両者の間に接触があった場面を取り上げよう。先に挙げたエピソード5「遊戯の練習と見学②」の活動の後に子どもたちが老人と偶然出会った時のエピソードである。

〈エピソード7：遊戯の練習の後で〉

老人たちが帰るとき、数人の老人（男、女）がホールに残っている子どもたちの中に入っていき、「かわいいね」「よくやったね」「上手だったよ」と笑顔で言いながら、子どもの手を触ったり頭をなでている。子どもたちはされるがままになっている。

「交流」が終わり、子どもたちはいっせいに散らばっていったが、老人が近くに残っている子どもたちの中へ入り、「かわいいね」「よくやったね」「上手だったよ」と声をかけ、頭をなでるといった身体的接触が見られる。子どものほうはされるがままになっており、突然の老人との接触にどのように接したらよいかわからない戸惑いが見られる。「仕組まれた交流」では、子どもは大人によって期待された行動様式を身につけていく。しかし、「仕組まれた交流外」の状況に置かれたとき、ステレオタイプの行動のみ身につけている子どもは、どのように振舞ったらよいかかわからないのである。

大人によって仕組まれることのない老人と子どもの相互作用は、世代間の分離が進行している社会では、両者が日常的・偶発的に出会う機会も少ないために生じにくい。しかし、企画化されていないところで両者に相互作用が生じている可能性はある。

阪田寛夫の『野原の声』（阪田 1991）という短編の一場面には、老人と子どもの相互作用が描かれている⁵。

姉さんの縁談を介してこれから親戚同士になろうとする「ぼく」と「おじいさん」は、「おじいさん」の部屋でお茶とお菓子が置かれた机を挟んで向き合うことになる。「ぼく」は正座をして小さくなっている。「おじいさん」は咳ばらいをするだけで何も言わない。そのうち「ぼく」もつられて「えへん」と咳ばらいをし、それがきっかけとなって二人の緊張が少しずつほぐれる。

「あなたのお友達の名前を、教えてください」という「おじいさん」からの質問により、二人は交互に友達の名前を言い合う。何度目かで「ぼく」が「野島、啓四郎君」と言うと、「おじいさん」は「野島君は元気か」と聞く。元気で50メートルを8秒0で走ったと「ぼく」が答えると、「おじいさん」の友達にも「野島君」がいて、100メートルが12秒8でハンマーも投げると「おじいさん」が言う。「ぼく」は、野島さんという老人が、ランニングシャツ一つになって陸上競技場の真ん中ではげしく回転している姿を想像していると、「おじいさん」は「大会は二位だ。惜しかったなあ」と残念がる。「来年はきっと優勝しますよ」と「ぼく」が言うと、「おじいさん」は「来年？」と言ったきり突然動かなくなり、口を少しあけ、目も見開いたままになる。

しばらくたって、「おじいさん」がすすめてくれたお菓子を食べながら、「ぼく」は「おじいさん」が若かった頃の友達の話をしていたことに気がつく。そこで「ぼく」は「その人は、今も走っているんですか」と聞こうとして、その言葉をお菓子と一緒に飲み込むと、代わりに「おじいさん」も陸上の選手だったのか聞いてみる。すると「いや、時々ベース・ボールをして、遊んでいたくらいで」と「ハイカラな」答えがかえってくる。その時、「ぼく」には「おじいさん」の顔の中に若い顔が見えてきて、「おじいさん」が野原で「ベース・ボール」をしながらみんなを励ます声まで聞こえてくるように感じる。

ここには、老人と子どもが二人だけになったときの緊張感とごちないやりとりの様子が描かれている。誤解を伴った会話の中には、老人と子どもの世界が交錯しており、大人によって仕組まれることのない交流がある。

4. 考察 —老人と子どもの別様の「交流」—

参与観察によって得られたエピソードを分析する作業を通して浮かび上がった老人と子どもの関係は、老人と子どもがいれば自然と会話や交歓が生じ、子どもの成長や老人の積極性を促す効果があるといった関係ではなく、むしろ両者の間に食い違いが生じたり、会話や応答も生まれず、お互いが別々の方向を向くような関係性であった。

特に、「仕組まれた交流」の分析から、企画化された活動や期待されている役割はこなすが、不意の出来事が生じた場合にはやりとりは途絶え、別々の方向を向いてしまう結果となることが示された。このような「仕組まれた交流」は、同一の活動は行っているものの、人為的で形式的な身体的・言語的交流である。

また、エピソード2の老人Bさんの「目が見えなくてね」というつぶやきに示されているように、目の前の「生の躍動にあふれた」子どもによって老人が自分の老いを否応なく自覚させられる事態が生じる。こうした事態の背景には、「成長」や「生産」に価値が置かれ、「衰え」「退行」に象徴される「老い」が否定的に捉えられる時代や社会の趨勢（栗原 1997）が見え隠れしている。現在、多様に試みられている「老人と子ども統合ケア」や「世代間交流」は、美しき能動的な老人像を強調しているが、このような老人像を抱くことによって、現実の「老い」を否定的、逸脱的にみることにのみなりかねない。その瞬間、老人が身にまとう老いや死の影や闇に包まれた部分は切り取られてしまい、そこに潜む「世界」の奥行きや豊かさが失われてしまう。

上記の帰結は、「老人と子ども統合ケア」の意図することからしても逆説的な事態を生み出すものとなる。これらは理念としては、豊かな人間関係を求めることを旨とするものでありながら、実践の中では老人と子どもの関係を疎遠で形式的なものにしていくことにほかならない。交流の機会や場を人工的に設定することによって積極的な効果を求める「老人と子ども統合ケア」には、生活実感や他者との関係を作っていくプロセスがないため、子どもは大人によって期待された行動様式のみを身に付けていくのである。

老人と子どもの関係について、「円環としての人生」のイメージに重ねて論じられることがある。人生を

直線ではなく円環でとらえると、老人と子どもはともに「死」の近くの場所に立つため、「隣り合わせの関係」であるという点で両者は共通したものを持っている（広井 2000a：107-108）という。しかし、むしろ、円環のイメージで捉えた両者の関係は、子どもはまだ出発点にいるが、老人は子ども期や大人期を過ぎて円を一周しており、最も距離が離れているという意味において「背中合わせの関係」である。この「背中合わせの関係」が、老人と子どもの関係の特徴である。「背中合わせの関係」では、お互いのことが分からないため、自然と会話や交歓が生じることはない。両者をなんとか向かい合わせようとして大人が交流を企画しても、その「仕組まれた交流」が終わったとたんに背中を向けてしまう。

自然に老人と子どもが出会っていたような、かつての三世同居の家族やムラの共同体がすでに失われてしまっているいま、両者が出会うには「老人と子ども統合ケア」のように意図的に両者の出会いの場を創設するしかないのかもしれない。そのなかで、第4次元に示されるような老人と子どもの相互作用の可能性があるとすれば、職員による企画から外れた出来事、第1次元、第2次元、第3次元からこぼれ落ちるような出来事である。われわれにできることは、「背中合わせの関係」をそれとして認めることなのである。

【註】

- 1 宮本常一は、1910年代頃には老人が子どもに野山や畑で知恵や経験を教えていたと言っている（宮本 1984）。
- 2 交流の具体的な姿については福島忍の研究に示されている（福島 2005）。
- 3 1993年、保育所の老朽化に伴い新たに保育所の建設計画が持ち上がり、保育所の土地確保の問題が生じた。そのころ、老人施設の建設計画も進んでおり、老人施設の1階部分が空いていたため、そのスペースに中央保育所を建てることになった。当初は、保育所と老人施設が同じ建物内にあったものの、老人と子どもが交流するという考えはなかった。ところが、1995年、当時の村長の提案により老人と子どもの交流が始まった。
- 4 K福祉総合施設での介護士へのインタビューによる。
- 5 河合隼雄もこの短編を取り上げ、老人と子どもの関係性について論じている。河合は老人と子どものやりとりを「食い違い」と「イメージの共有」という観点から論じている（1994：105-109）。本稿では、ごちないやりとりの中で、両者の視線がズレながら交錯するという、老人と子どもの象徴的なプレゼンスの在り様が浮かび上がる事態として阪田の短編を取り上げた。

【引用・参考文献】

- 福島 忍「少子高齢社会に向けた子ども一高齢者の世代間交流の促進に関する市町村の取り組み ―長野県における保育園の中高年・高齢者保育サポーター事業の展開―」『長野大学紀要』第27巻第2号、2005年
- 広井良典『ケア学』医学書院、2000年 a
- 広井良典編『「老人と子ども」統合ケア―新しい高齢者ケアの姿を求めて』中央法規、2000年 b
- 広井良典『生命の政治学 福祉国家・エコロジー・生命倫理』岩波書店、2003年
- 河合隼雄「子どもと老人」『河合隼雄著作集第6巻 子ども宇宙』岩波書店、1994年
- 厚生労働省『平成15年版厚生労働白書』ぎょうせい、2003年
- 鯨岡 峻『関係発達論の構築 間主観的アプローチによる』ミネルヴァ書房、1999年
- 栗原 彬「離脱の戦略」井上俊ほか編『成熟と老いの社会学』岩波書店、1997年
- 草野篤子・秋山博介編『現代のエスプリ インタージェネレーション』第444号、2004年
- 増山 均「〈子ども・高齢者〉問題と世代間交流の動向」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』49、2003

年

増山均ほか「〈子ども・高齢者〉問題研究への視点ー子どもと高齢者の関係から子育て・教育問題を問
い直すー」『フィロソフィア』第92号 早稲田大学哲学会, 2004年

宮本常一『家郷の訓』岩波文庫, 1984年

阪田寛夫「野原の声」『桃次郎』楡出版, 1991年

清矢良崇「社会化過程における『老人ー子ども』関係ーミクロな社会化研究の一視点」柴野昌山編『文
化伝達の社会学』世界思想社, 2001年

多湖光宗「次世代育成に貢献するグループホーム・宅幼老所ーお年寄りが輝き子ども達の自立につなが
る高齢者ケアと子育ての相乗効果」『エイジレスフォーラム』(3), 2005年

鷺田清一『「聴く」ことのカー臨床哲学試論』TBSブリタニカ, 1999年

鷺田清一『老いの空白』弘文堂, 2003年

(2006年12月15日 受理)